

内モンゴルのアルジャイ石窟の壁画（一）：
第二八号窟を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00002557

内モンゴルのアルジャイ石窟の壁画（一）
——第二八号窟を中心に——

楊
海
英

一	チンギス・ハーンの最期の舞台……………	33
二	元朝時代の仏教密教資料―二八号窟を例に……………	34
三	元朝モンゴルの二重の聖……………	37
四	今後の展望……………	38



一 チンギス・ハーンの最期の舞台

内モンゴルのアルジャイ石窟の壁画（一）

― 第二八号窟を中心に ―

楊 海 英

中華人民共和国内モンゴル自治区の西部、黄河の南にオルドスという高原がある。オルドス高原の西北部にアルブスという広大な山地が広がり、そのなかから大規模な石窟群が一九八〇年代末に発見された。二〇〇三年三月、中国の国家重点文物（重要文化財）に指定された（地図参照）。

石窟群を現地のモンゴル人はアルジャイ（阿爾寨）と呼び、中国語では百眼窟^{（イェンケイ）}という。もともと数珠の数と同じく一〇八窟あったと伝えられているが、現在確認されている洞窟は六五で、岩壁に彫った仏塔は二十八を数える。石窟には約千点以上の豪華絢爛な壁画が残っており、二〇〇〇年春には大量のモンゴル語とチベット語の文書が出土した。

アルジャイ石窟のなかで、もっとも古い窟は長方形の造りで、奥に方形の柱を彫り出した形式となっている。この種の石窟は四世紀ころの北魏時代に開造された、と考古学者や石窟研究家たちはみている。しかし、最近ではこの種の方形中心柱窟はイ

ンドのチャイティア窟やアフガニスタンのバーミヤーンの仏龕窟の影響を受けている可能性も指摘されている。

石窟のあるアルプス山周辺は、十一世紀ころに勃興した西夏王国の領土に入っていた。西夏王国は当時の新興勢力であるモンゴルになかなか帰順しようとしなかった。そこで、チンギス・ハーンは一二二六年の秋に西夏征服のためモンゴル高原を出発した。

チンギス・ハーンは黄河を南に渡って、今日のオルドス高原に進軍した。十三世紀に書かれた『元朝秘史』に、チンギス・ハーンはアルプス山で巻狩の最中に馬から落ちて、「多数の洞窟」に入って駐營したとある。「多数の洞窟」とは今のアルジャイ石窟である。西夏王国は敬虔な仏教国で、「多数の洞窟」は石窟寺院だった。仏教についてほとんど知識をもたなかったモンゴル人たちは単純に「多数の洞窟」と呼んだ。

西夏滅亡を目前にして、チンギス・ハーンは落馬の怪我がもとで死去する。西夏が滅んで元朝時代になっても西夏の僧侶たちは厚遇され、アルジャイ石窟寺院は繁栄し続けた。十四世紀末にモンゴルが中原から撤退し漢土に明朝が成立するが、アルジャイ石窟は万里の長城の北側に位置し、ずっと北元と呼ばれるモンゴルの勢力下にあった。そして十七世紀半ばにユーラシア東部の草原地帯が後金国に統合されていく混乱のなかで、石窟寺院は没落の一途をたどっていた。

二 元朝時代の仏教密教資料——二八号窟を例に

モンゴルはユーラシアに跨る大帝國を建立した。帝國の東方を成す元朝はチベット仏教を国教とし、チベットの高僧を招いて帝師や国師の称号を与えていた。アルジャイ石窟の壁画は、西夏時代のものが少数で、大半は元朝時代以降に製作された。一部の壁画の四方には回鶻文字モンゴル語とチベット語、それに古代インドで使われたサンスクリットで題字が書いてある。いずれも仏教の神々を称賛する内容であるが、多言語の同時運用は帝國の権威と多様性を演出している。

本報告ではアルジャイ石窟のなかの第二八号窟内の壁画を紹介することにした。私は一九九九年から毎年二〜三回はアルジャイ石窟を訪れるようにしている。壁画を観察し、出土文書を整理してきた。その際、石窟内で壁画を模写しつづけているオルドス市ハンギン旗出身で、現在ドイツを拠点として活躍中の画家ナソンバト (Nasunbatu) 氏

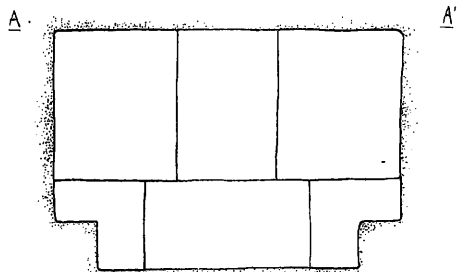
と出会った（写真1、2）。ナソンバト氏には将来、壁画を復元したり、社会に向けて公開したりするための重要な課題が与えられている。

二八号窟は岩壁の南側にあり、典型的な平頂方形中心柱窟である（平面・断面図参照）。すでに触れたように方形中心柱窟は北魏時代から造営が始まっているが、現在の二八号窟には西夏以前の壁画はほとんど残っていない。地元の考古学者や文物管理者たちは、二八号窟内の壁画は例外なく元朝時代のものだとみている⁴。王朝が替わる度に、前代の壁画を削って新たに描写することが多いという。

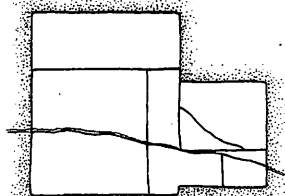
まず、入口の西側すなわち南壁の右側には「チンギス・ハーンとその一族を祭る絵」と呼ばれている壁画がある（写真3、4、5）。この作品はアルジャイ石窟のなかで、いままでにもっとも注目されてきた壁画のひとつである。中央のチンギス・ハーンを三人の妃が囲み、その左側に四人の息子たちが並んで座っている。一族の前にはさまざまな民族からなる臣下たちが左右二つのグループに分かれて座っている。そして彼らの右前方には馬やラクダ、それに牛の群れを献上する人々がいる。この絵の背景になっているのは、アルジャイ石窟そのものだとして理解されている。人生最期のときにアルジャイ石窟で療養していたことから、死後に石窟内に一族を神聖視する壁画が描かれた、との見方が定着している。

入口に向かって奥の正壁には仏龕が開造されている。東西両壁には仏龕がなく、壁画が一面に描かれている（写真6、7）。右壁には上段に奥から持金剛、大威徳金剛^{ヤマデタカ}、密修閻魔（写真8、9）、大威徳金剛^{ヤマデタカ}（写真10、11）、密集金剛（写真12、13）、二つの憤怒尊など七つの壁画が配置されている。その下段には七人の大成就者が並んでいる（写真14、15、16、17）。上段の方に比べて、下段の方が剥落したり、破壊されたりして現存状態が好ましくない。

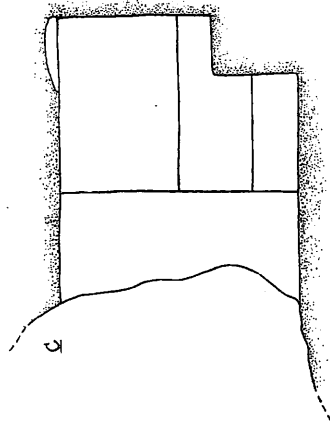
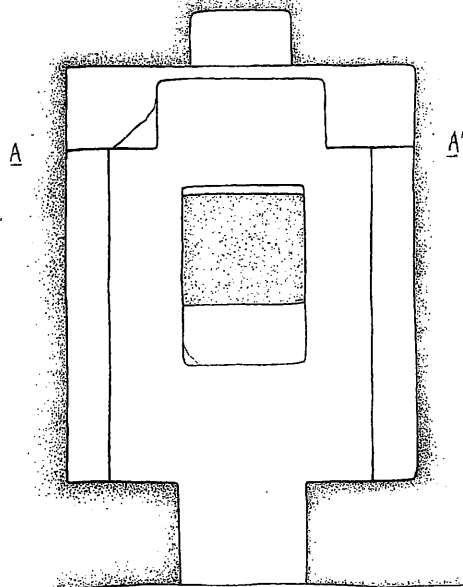
左壁にも二段の壁画があった。現在、上段には奥から勝樂金剛^{テムチュウク}（写真18、19）、持金剛、勝樂輪（写真20、21）など七つの壁画があり、下段には高僧かもしくは祖師の図が少し残っている。左右対置的に展開されている構図を考えると、恐らく左壁の下段にも七人の高僧か祖師、あるいは七つの場面が描かれていただろう。



剖面



剖面



0 2 米

28号石窟平、剖面图

三 元朝モンゴルの二重の聖

上で紹介した二八号窟内の壁画のような男女合体の秘密仏や憤怒尊を一般のモンゴル人たちはイダムと呼ぶ。イダムとは守護尊を意味するチベット語に由来する。このような守護尊は普通、灌頂していない者には公開しない。私自身も子供のころにチベット仏教の寺院に入った時、秘密仏や憤怒尊にはいつもシルクの幕が掛けられていたことを覚えていいる。このように神秘的な色彩に包まれた壁画にはどのような原理が隠されているのだろうか。

立川武蔵は密教について論じた際に、次のように指摘している。中世（十～十五世紀）チベットの仏教は密教的色彩が強く、九～十世紀頃にインドで成立した新しい密教經典の「勝樂タントラ」や「呼金剛タントラ」が重視された。これらのタントラ經典の主尊である勝樂尊などは、血に満ちた頭蓋骨杯をもち、肉切り包丁を振り上げ、明妃を抱く。このような秘密仏はチベット中世以降の密教バンテオン内の代表であった。チベット高原だけでなく、およそチベット密教が伝わった先々で、不動の地位を獲得して諸神の頂点に立つようになったのも事実であろう。

血や骨の儀礼、性的オルギーをも含む性崇拜、憑依などのエクスターゼが純化される局面や度合いによって、ある宗教形態が密教か否かをみることができると立川武蔵はさらにいう。つまり、日常において「不浄なるもの」が「浄なるもの」の価値をもつように聖化された場合、血や骨の儀礼もすぐれて密教的となる。神と女神の合一した姿も世界そのものである。

立川武蔵流に考えれば、アルジャイ石窟第二八号窟はまさに元朝時代のモンゴルの聖なるものを集約した場所となる。チンギス・ハーンはいわばモンゴルそのものを創造した人物で、死後にも神格化され、その祭祀活動は今日までシャーマニズムのしきたりに従って維持されてきた。しかし、元朝の支配者たちにとって、チンギス・ハーンというひとりの「神」だけでは不十分だった。かれらはさらにチベット仏教の神々の威力をも借用した。仏教の典籍はシャーマンの口伝するテキストより論理的に見え、シャーマニズム的な宇宙観だけでは完全に純化できなかった血や骨の儀礼をも聖化できたところが、魅力的であつただろう。

このように、二八号窟は、モンゴルの唯一にして固有の聖としてのチンギス・ハーンとチベット仏教の体系的な聖とを対等に扱っている。いわば、二つの神聖性が演出された場である。

四 今後の展望

仏教が中国や朝鮮半島そして日本に伝わったもとも古いルートのひとつがシルク・ロードである。バーミヤーンや敦煌をはじめ、多数の石窟が東伝のルート上に造営された。石窟は造営当時の最先端の建築技術や美術の精粹を集めて造られた。東西の文明が融合して創出された文化の宝庫である。

北アジアの草原地帯に仏教がいつ、どのようにして伝わり、どんな形で開花したのか。また、元朝時代の仏教信仰の実態はどのようなものだったのか。これらの問題を解明するためには、アルジャイ石窟内の壁画や出土文書が大きな手がかりとなる。今後、これらの資料に対する総合的な研究が期待されている。

注記 本研究は科研費「アルジャイ石窟1号窟出土モンゴル語古文書に関する歴史人類学的研究」(大野旭(楊海英)代表)の研究成果の一部である。なお、一部文章は私が二〇〇四年二月十六日に『讀賣新聞・夕刊』に掲載した「チンギス・ハーンの遺産―中国・アルジャイ石窟」と重なっていることを断っておきたい。アルジャイ石窟で調査していたころには文物管理所所長の巴図吉日嘎勒先生の多大の支持を得た。友人の Nasunbatu 氏は本研究に模写作品の掲載を快諾してくれた。併せて衷心より感謝したい。

- 1 アルジャイ石窟出土の文書については、大野旭(楊海英)著『アルジャイ石窟一号窟出土モンゴル語古文書に関する歴史人類学的研究』(科研報告書 二〇〇五年三月、課題番号：一五五二〇五一四)に詳しい記述がある。
- 2 東山健吾 『敦煌三大石窟』講談社 一九九六年、五二頁。
- 3 宮治昭 『バーミヤーン、遙かなり』日本放送出版協会 二〇〇二年、一二五頁。
- 4 アルジャイ石窟については綿密な考古学的調査はまだ実施されていない。将来、各窟を精査すれば、現存の壁画の下に、あるいは隅にもっと古い時代の壁画の断片が発見される可能性はある。
- 5 アルジャイ石窟の壁画に関する画像学的研究はまだ始まったばかりである。壁画の内容と名称等については、地

元の考古学者や文物管理者、それにアルジャイ石窟を拠点とするモンゴル人僧侶たちからの情報を総合して、暫定的に用いていることを断っておきたい。

6 田中公明 「チベット仏教美術」 立川武蔵 頼富本宏編『チベット密教』春秋社 一九九九年、一六三―一八一頁。『タンカの世界―チベット仏教美術入門』山川出版社 二〇〇三年（初版二〇〇一年）。

7 立川武蔵 「序論―チベット密教とは何か」 立川武蔵 頼富本宏編『チベット密教』春秋社 一九九九年、一二―一三頁。

8 立川武蔵、前掲文、一六―一七頁。

9 楊海英 『チンギス・ハーン祭祀―試みとしての歴史人類学的再構成』風響社 二〇〇四年。

10 巷の研究者のなかには、チベット仏教は「性的な儀礼」を重視するため、元朝帝室に歓迎されたという、世俗的な目でセクシユアルを強調する見方がある。『元史』列伝・后妃一の項には、大都城内の萬寧寺に多数の「秘密佛像」が安置されていたが、見学に訪れた成宗の妃はそれを醜怪とし、ハンカチで顔を覆って去り、やがて仏像も破壊された、という記事がある。大都のチベット仏教寺院にも幾度かの波乱があったことを示している。

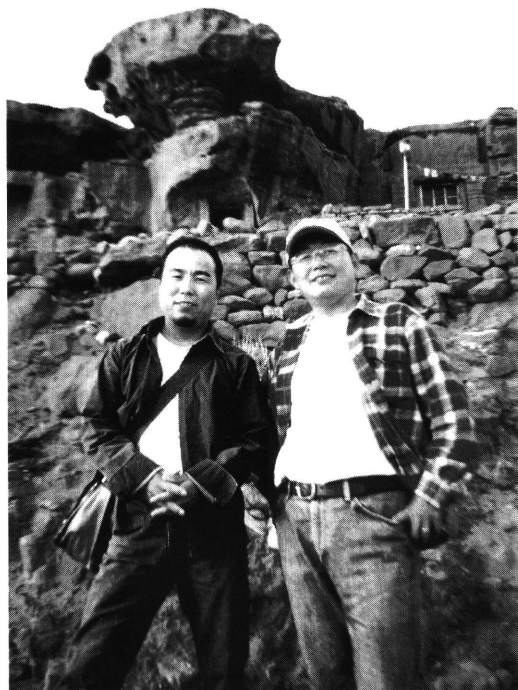


写真1：ドイツ在住の画家ナソンバト（左）と筆者。2004年夏、アルジャイ石窟を背景に。



写真2：アルジャイ石窟内で壁画を模写するナソンバト氏

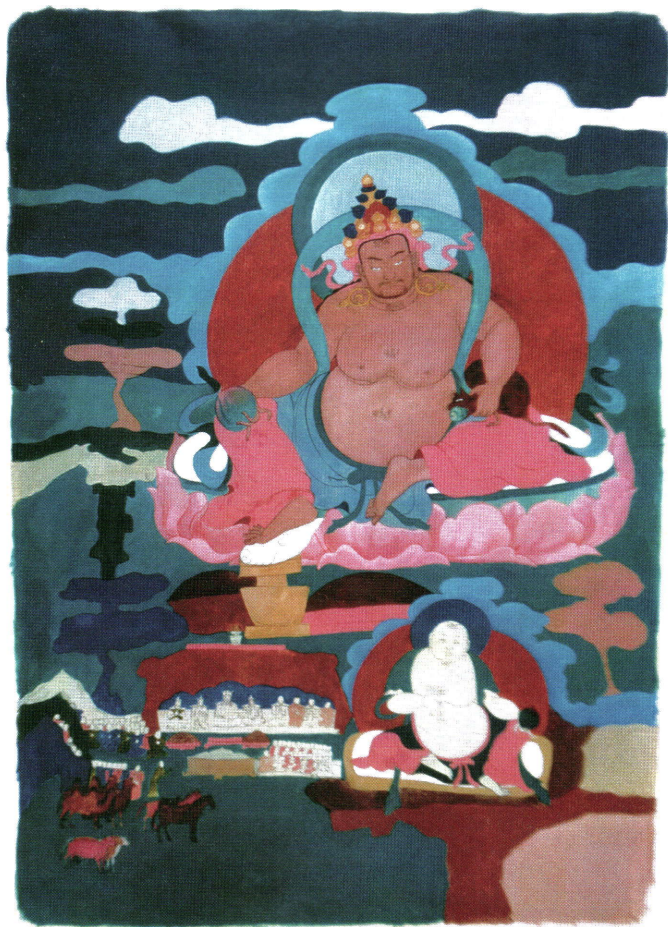


写真3：28号窟南壁右側の壁画全体（模写）

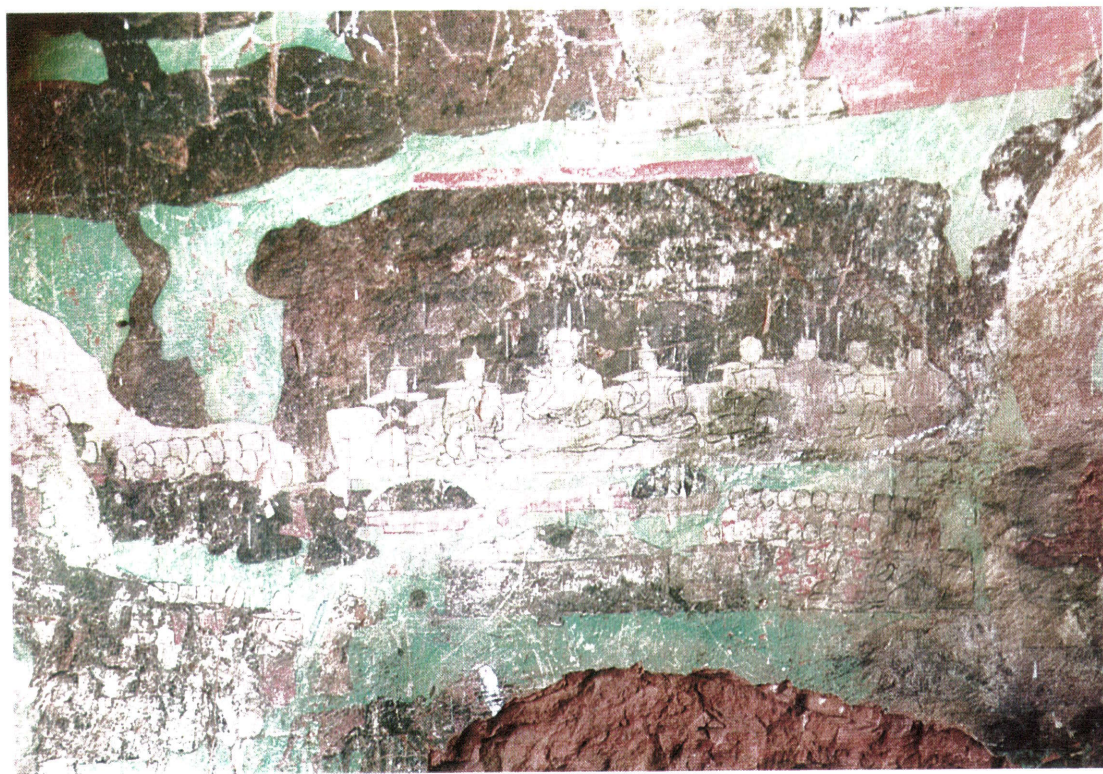


写真4:「チンギス・ハーンとその一族を祭る絵」という部分

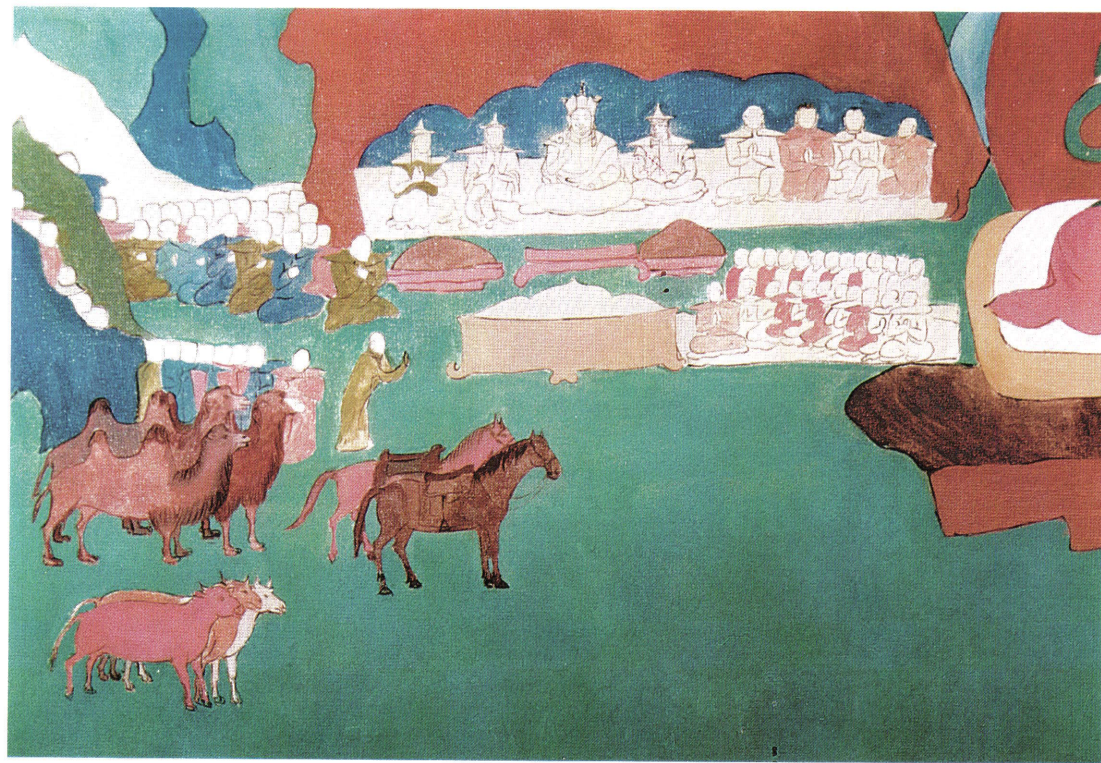


写真5：「チンギス・ハーンとその一族を祭る絵」という部分の模写



写真6:28号窟右壁の壁画



写真7：28号窟左壁の壁画



写真8：密修閻魔 右壁



写真9：密修閻魔の模写



写真10:大威徳金剛 右壁



写真11:大威徳金剛の模写



写真12:密集金剛 右壁



写真13:密集金剛の模写



写真14:大成就者(奥から1番目) 右壁



写真15:大成就者(奥から2番目) 右壁



写真16:大成就者(奥から3番目) 右壁



写真17:写真14、15、16の模写



写真18:勝樂金剛 左壁



写真19:勝樂金剛の模写



写真20:勝楽輪 左壁



写真21:勝楽輪の模写